

第277回くらしの植物苑観察会 令和4年4月23日(土)

「桜草の栽培史-明治期から昭和初期まで」

水田 大輝(日本大学 生物資源科学部)

毎年、春先には何百とある園芸品種が私たちを楽しませてくれる桜草ですが、園芸品種が出現したのは江戸時代(中期以降)になってからです。桜草の最も古い記録が残っているのは室町時代中期からで、以降、様々な書物に桜草が登場します。栽培や育種を通して人が桜草とどのように関わり、愛でてきたのかを、竹岡(2016)の分類に沿って紹介すると、第1期の室町中期～後期では野生由来の桜草の栽培が始まり、第2期の室町後期～江戸前期に幅広い社会層や地域で桜草が扱われるようになり、第3期の江戸中期では桜草の園芸品種化が始まりました。第4期の江戸中～後期では桜草「連」の結成と実生由来の品種が出現し、第5期の江戸末期・幕末では園芸品種の花の形質がさらに多様化しました。今回は、その続きを紹介します。

第6期 明治年間(1868～1912) ー江戸の桜草連由来の園芸品種の継承と巨大輪花の誕生ー

江戸幕府の瓦解により桜草「連」(＝同好会)の中心だった武士の層がなくなったため桜草品種の栽培者の多くを失いましたが、この時代の過渡期中で、園芸品種の維持と普及に繋げた人達がいました。

明治の初めに、江戸で桜草「連」(＝同好会)の席頭を務めた柴山政富が皇居で桜草の展示会を開いたことにより、これを見たり噂を聞いた華族や資産家などが趣味として栽培を始め、桜草づくりが復活しました。しかし、この時の趣味家は、門外不出を基本とした閉鎖的な桜草連の掟を固く守っていました。

明治の後半には、販売用の桜草品種の銘鑑がいくつも発行されました。例えば、植草園の伊藤太郎吉が明治37年(1904)5月に発行した『桜草銘鑑』は306品種の名前とその簡単な特徴、品種の等級付けをして説明しています。常春園の伊藤重兵衛が作成した明治21年(1888)5月の『桜草銘鑑』は221品種を、明治32年(1899)5月の『桜草銘鑑拾遺』は68品種を、明治40年(1907)5月の『桜草銘鑑』(図1)は311品種を簡単な特徴を添えて紹介しています。なお、明治40年の『桜草銘鑑』で発表された新品種の‘八雲’、‘浅間’、‘朝日’などの名前は、申し合わせにより日露戦争で活躍した軍艦名に由来するそうです(図1)。また、関西では宇治朝顔園の上林松寿が明治22年(1889)頃に創業し、朝顔を主体として、菊、花菖蒲、桜草、宇治茶などを扱いました。通信販売用に『宇治朝顔園月報』や『朝顔画報』などの月刊誌を発行しています。例えば、明治34年(1901)5月26日に発行された『朝顔画報 第12号』では、各品種を等級分けして値段が記載されており、最優等種の‘大明錦’と‘五大州’はそれぞれ1円と50銭の値が付けられ、‘獅子奮迅’や‘大力無双’などは35銭で、‘松の位’や‘初日野’、‘三保の古事’などは15銭で販売されました。また、一般的な桜草の花の大きさは約30～40mmの中輪花ですが、明治に入ってから大輪花(40～50mm)を超える、これまでになかった巨大輪花といわれる‘富士越’や‘五大州’、‘八橋’のような50mm以上の花を咲かせる品種が新たに誕生しました。その他、‘鹿島’や‘人丸’をはじめとする個性的な花も数多く作出されました。

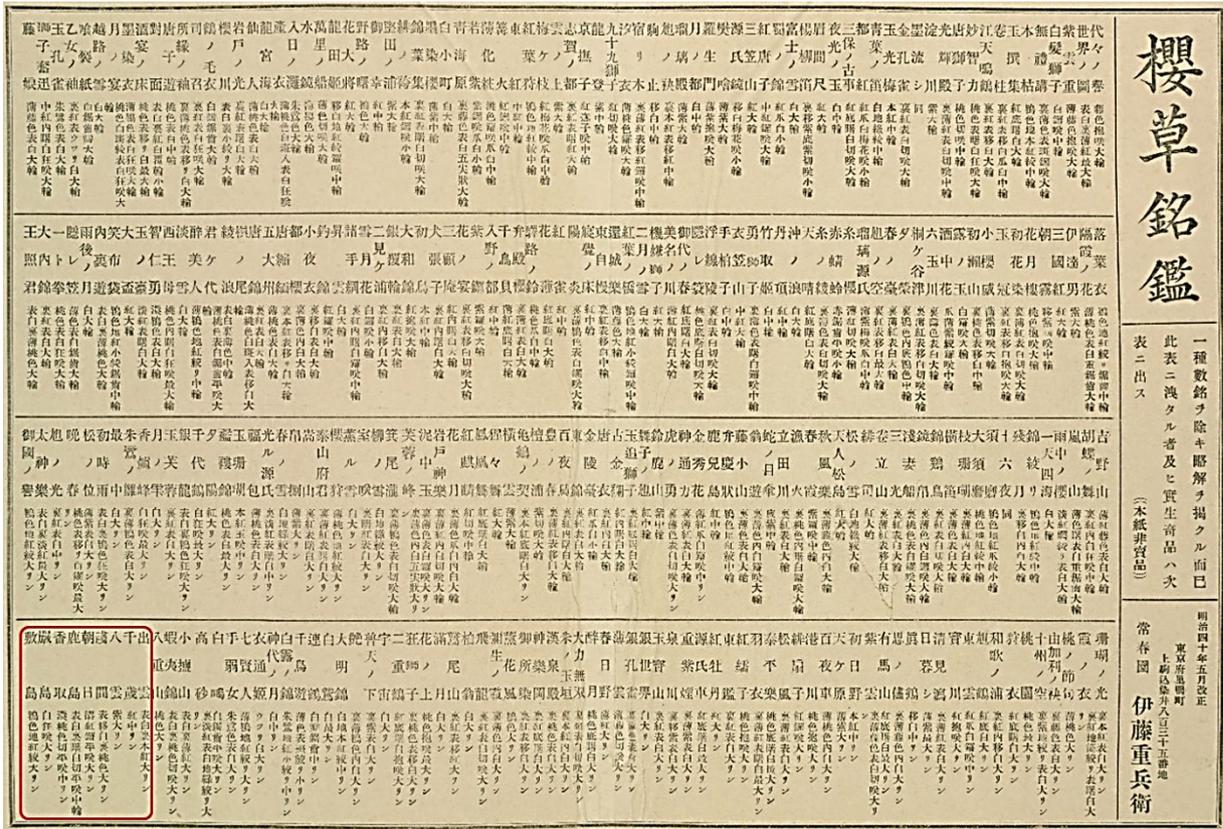


図1.『桜草銘鑑』明治40年(1907)5月改訂版(常春園 伊藤重兵衛作)
赤線で囲んだ品種は、常春園が発表した新品種。

<国立国会図書館デジタルコレクションより引用>

第7期 大正年間(1912~1926)・第8期 昭和初期 一桜草の受難・沈滞の時代一

関東大震災(大正12年(1923)9月1日)や第2次世界大戦の突入により、幾度も桜草の栽培が困難な状況となりましたが、一方で愛好者団体が結成され啓蒙普及活動が進められました。

まず、大正7年(1918)、江戸時代からの桜草園芸品種の保存と品種改良(新品種作出)を目的として、東京の会員を対象に「日本桜草会」が創設されました。役員には、伊藤重兵衛や田村景福、永井誠也をはじめとする新品種を積極的に作出していた各氏が名を連ねました。春先の花時には、日比谷公園で鉢を並べて一般公開していましたが、第二次世界大戦へと突き進んでいく時勢の中で、昭和15年(1940)に第23回の陳列会を最後に自然消滅してしまっただけでなく、昭和11年(1936)には、大阪で「浪華さくらそう会」が創設されて毎年展示会を開催し、会員の加藤亮太郎とともに京都の鈴鹿義一や瀬川弥太郎の友好的な援助により桜草苗の配布が行われました。交換・分譲なども門外不出の伝統にとらわれず開放的な雰囲気がありました。しかし、昭和18年(1943)頃から戦争の激化により活動を休止せざるを得ませんでした。なお、これらの期に作られた品種には、「秀美」や「高長桃色」、「折紙付」などの巨大輪花が明治に引き続き作出された他、「戦勝」や「戦友」、「国の光」と命名された戦争に関わる当時の日本の体制を反映したものも存在します。

参考文献：竹岡泰通 著(2016)『桜草栽培の歴史 第2版』、創英社/三省堂書店
鳥居恒夫 著(2006)『色分け花図鑑 桜草』、株式会社学習研究社

.....

次回予告 第278回くらしの植物苑観察会 令和4年5月28日(土)

「日本の森林の多様性」辻 誠一郎氏(東京大学名誉教授)

13:30~15:30 苑内休憩所集合 申込不要 定員20名